

成長の「種」

わが社のこだわり



(株)石田コーポレーション
(米子市)

農業参入、サツマイモ初輸出

8月下旬、総合商社の(株)石田コーポレーション(米子市米原8丁目)本社で、香港へのサツマイモの初輸出に向け、従業員が現地仕様のラベル発注や資材調達といった準備を進めていた。

グループ会社の一つ、(株)富ますシルクファーム(同市富益町)が米子市の弓浜半島で育てた「紅はるか」で、高級マンション街に立地するイオンストアーズ香港の旗艦店「香港イオンスタイルコーンヒル」で9月3日から7日間開かれる「鳥取岡山観光物産展」で提供。現地の反応を探り、本格輸出にこぎ着けたい考えだ。

石田コーポレーションは取扱商品を上下水道用資材や住宅設備機器、建築資材、環境資材などに広げるとともに、営業拠点を山陰両県に広く展開。住宅リフォームを

「水の如く」柔軟対応で挑戦続ける



社員と事業の進展状況について話す石田康雄社長(右)。新たな市場や分野に積極的に挑戦している=米子市米原8丁目、石田コーポレーション

手掛ける石田リフォームネット(株)(同市米原6丁目)、リサイクル建材製造販売の(株)エコマ(同市和田町)を立ち上げるなどして業容を拡大してきた。設置したグループ会社は8社を数える。

経営の基本理念は「水の如く」。時代や環境の変化に柔軟に対応しながら新たな市場や分野に挑戦。グループ内連携での相乗効果も生み出し、年間売上高が単体で50億円に迫るまで成長を遂げた。社長

訪日外国人客需要狙いイチゴの観光農園

の石田康雄(67)は「狭い山陰両県だけ、限られた分野の枠の中だけで稼いでいくには限界がある」と、事業展開に聖域を設けない方針を説く。もちろん「手当たり次第」ではない。農業参入も確かな勝算があつてのこと。山陰両県では農業従事者の高齢化や耕作放棄地の拡大が深刻化しているものの、海外との貿易も手掛ける中で高品質な産品を求める声を多く聞き、大きな可能性を見いだしたのだ。

農業関連事業に着手したのは4年前にさかのぼる。朝晩と日中の寒暖差の大きい気候で良質なコマヤトマ



所在地	米子市米原8丁目1-32
社員数	77人
TEL	0859 (33) 6233
創業年	1970年
主業務	建築資材販売

トの産地となっている鳥取県日南町。そこを拠点に2014年、地元農産物などを販売する日南物産(株)(鳥取県日南町三栄)を設立した。さらに農業生産法人として、15年には耕作放棄地が問題となっている弓浜半島に富ますシルクファーム、17年にイチゴなどの栽培に取り組み(株)日南シルクファーム(同町湯河)を相次いで立ち上げた。

富ますシルクファームが生産する紅はるか甘さが特長。境港市の水木しげるロード沿いに今年2月オープンしたアンテナショップ「黄金(ごうごん)マーケット」では、境港



サツマイモなど生産した農産物を加工して提供するアンテナショップ「黄金マーケット」 境港市大正町

に寄港したクルーズ船客ら訪日外国人にも焼き芋が人気だ。

供給体制の強化に向け、貯蔵施設も整備している。長期保存するとともに、熟成することで甘みを引き出し、おいしいイモを通年で提供する計画だ。また、規格外品などをペースト化する専用工場もこのほど建設。菓子メーカーに原料などとして提供する。

サツマイモと並んで同社が力を入れているのがイチゴだ。作業姿勢の改善と作業時間の短縮につながる高設栽培システムを導入し、「章姫」と鳥取県園芸試験場が品種登録を出願した「とつておき」を栽培している。

サツマイモと異なり果実が柔らかく、輸送に適さないなどの課題がある中、考えたのが観光農園。米子市彦新田にビニールハウス6棟を建設し、収穫体験が行えるようにする。利用客の休憩施設や大型駐車場を整備し、年明けの開業を目指す。

運営はシステム開発の(株)ケイズ(米子市両三柳)と連携し、ICT(情報通信技術)を活用して効率化。ハウス内の温度や照度などをセンサーで常時計測してデータ化することで、イチゴの生育に適した環境を維持し、品質の安定化などにつなげる。取り組みは

施設整備、グループ内連携最大限に生かす



中国吉林省・延吉市にある現地法人の常設展示場。山陰両県の企業と現地との取引拡大を支援している

経済産業省の農商工連携支援事業に採択された。

観光農園で狙うのは主に訪日外国人客需要だ。とりわけ、米子空港(境港市佐斐神町)と直航便で結ばれる香港の富裕層などは日本産イチゴを好む傾向にあるという。「増加する訪日客に楽しんでもらえる施設を作り、農業や観光の振興につなげたい」と石田。やるからには徹底的に研究や市場調査に取り組むつもりだ。

一連の施設整備には石田コーポレーションが建築資材を確保するなど、グループ内の事業間連携を最大限に生かしている。

「地域経済の活性化に尽力したい」

同社は農業参入に先立って11年、輸出入関連事業や販路開拓を目指し、中国吉林省・延吉市に現地法人「延辺大山商貿有限公司」を設立している。この事務所をアンテナショップとして活用し、加工食品などを手掛ける山陰両県の企業と現地バイヤーとの橋渡しに力を入れている。

農業参入にも通底するのが「地域経済の活性化に尽力したい」との思いだ。今年7月にリニューアルした「水木しげるロード」の路面には石田コーポレーションが納めた石材タイルが使われ、サントリー天然水奥大山ブナの森工場(鳥取県江府町御机)に新設された展望ステージにも廃プラスチック再生資材を供給している。こうしたことから「地域経済が活性化しなければ投資が起こらず、建築資材の需要も高まらない」と石田は強調する。

東京五輪・パラリンピックが開かれる20年には創業50周年を迎える。時代の変化がますます激しくなる中、引き続き「水の如く」柔軟に対応し、時には岩をも穿つエネルギーを発揮しながら積極的にビジネスチャンスをつ捉えていく構えだ。新たな一手も注目される。

(文中敬称略)

(森安哲史)